

役割語における「差別」を考える

小林 美恵子

1. はじめに

金水（2000・2003）は、物語やマンガの世界である特定の登場人物が語ることば（たとえば博士語・お嬢様ことば）や、日本語母語話者が共通して、ある特定の人物が使用するとイメージするようなことばづかい（たとえば女性語など）を「役割語⁽¹⁾」と名付け、これらは、仮想現実（ヴァーチャルリアリティ）であり、現実の話者としての博士・お嬢様・女性などが使うことばとは別物なのだとした。

「役割語」が仮想現実であるとされたことは、それ以前の「位相」の概念の中で、現実のことばと位相が隔たっていることに疑問を持ち、その意味を考える立場、また、その中で位相としてのたとえば「女性語」というカテゴリー—そのものに疑問を持つという立場を無化したとも言える。つまり、もともと現実と仮想現実は違うのだから、差異をとりたてて問題視することにさして意味はないというわけだ。そして役割語は仮想現実であるから、我々のもつ固定観念（ステレオタイプ）のあり方を示すものではあっても、それを現実として、あるべき姿と考える必要はないということにもなる。いわば「現実」から解き放たれ、いわゆる位相としてあった「女性語」「老人語」「若者語」などは、これ以後「役割語」として研究されることになった。役割語研究は、位相研究としては考えにくかった翻訳や日本語教育などに関わる対照研究などにも展開していくこととなる。

いっぽうで、母語話者ならば誰もが共有する文化的ステレオタイプとしての「ある特定の人物像」がしゃべるものとして「役割語」が想定されたという点については、それが仮想現実であるということを免罪符に、ステレオタイプが内包する偏見・差別を容認するのではないかという危惧も感じさせられた。研究として偏見・差別を内包するステレオタイプを抽出し、カテゴリ

一化すること自体は必ずしもそのまま偏見や差別であるとは言えないにしろ、常に偏見・差別である可能性も含む⁽²⁾。また、ステレオタイプと結びついた役割語が「あるべき姿」として現実の中で再生産されていく可能性を否定できない。このことについては当時、金水自身も認識していたことが以下の記述に見てとれる。

日本で生活する日本人にとっては必須の知識であるが、役割語の知識が、本当の日本語の多様性や豊かさを覆い隠し、その可能性を貧しいものにして
いる一面、あるいは役割語の使用の中に、偏見や差別が自然に忍びこん
でくる一面に気づかなければならない。(中略) ヴァーチャルな日本語の仕組みを知り、時にはヴァーチャルな日本語をうち破り、リアルな日本語をつかみ取ろう。(金水2003:202 下線は小林による)

金水(2003『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』)により役割語の概念が提唱されてちょうど10年である。この間金水自身も論考をさらに展開し、さまざまな場で総括や展望を発表し、彼と周辺の研究者による2冊の論考集も編集している。このうちの金水編(2007:2)「導入」では、「役割語」について、「スピーチスタイルは個々の話者の知識において人物類型と結びつく」が「知識は言語共同体において共有されていることがより重要であり」「共有状態を踏まえて役割語の利用が有効になる」「言語表現における役割語の使用を通じて、話者が新たに役割語を学習することにもつながる」「(役割語が役割語として機能するのはフィクションの場合だが：小林注)一般の話者による、日常的な会話の中でも、役割語の知識は利用されることがあると考えるべきである」(下線は小林による)とする。「利用」や「学習」という言わば「再生産の機能」を強調する論述からは金水(2003)にあった「役割語」への懸念・警鐘的なニュアンスは姿を消している。

「役割語」は大変便利な、魅力的な概念のようで、大学生の卒論をも含め、多くの研究者が論考を展開してきているが、それらの中で10年前の私たち、あるいは金水自身も持った懸念が実際のものとなっているように思われる。

2011年タリン大学で行われた第13回EAJS大会では金水の基調講演に対して、差別的ではないかという疑義が出て議論になったとも聞く⁽³⁾。

役割語と「差別」はどのように関わっているのだろうか。当初その危険性が認識されていた役割語と差別の問題が、研究の過程で差別的と批判されるまでに変化して行ったとするならば、それは役割語の概念や、研究のどのような発展のしかたにかかわるものなのか。差別につながらない役割語の研究の方向はあるのか。金水（2003）、金水編（2007、2011）に掲載された論文を中心に、その周辺の論考も含め、検証しながら考えてみたい。

2. 「役割語」研究の展開

2.1 金水の「役割語」研究とその後の展開

金水（2003、2007 a、2007 b、2008 a、2008 b）などで、金水は「役割語はヴァーチャルであり、フィクションにおける言葉である」「役割語を用いるのは通常は物語の主人公ではなく脇役（背景的人物）である」、また「役割語を用いる人物像は「母語話者ならば誰もが共有する文化的ステレオタイプ」であり現実社会にモデルがある」とした。

これに基づいて金水は「博士語」「お嬢様ことば」「ピジン日本語」「近代マンガ（登場人物）の言語」「マンガに見る異人ことば」など、特定の人物像のことばを社会的・歴史的背景にさかのぼって考察し、また、役割語を日本語史の中に位置づける試みなどを行っている。それらはおおむね、語彙・語法・言い回し・イントネーション等、言語形式の部分的な特徴を重要な指標としながらも、全体的な特徴としての話体に関する考察であり、分析される役割語の話者はフィクション中の比較的限られた人物像である。金水自身ははっきり言明することは多くはないが、そのような役割語の成立に差別的な意識が介在する場合があることを、それらの論考から読みとることができる。

いっぽうで、「フィクション」「脇役」「現実社会にモデルがある」というような役割語につけられた限定は、その範囲を乗り越えようとする志向を生む。また金水（2003など）では「役割語」を話体（全体的な特徴）とするが、同時に指標としての言語形式の要素をも「役割語」とするなど、曖昧な部分も

あることから、これらを補い広げ、金水が論及しなかった部分を埋めるかのようになり、金水自身も関わりながら研究が展開されていった。

その後の役割語研究は、金水のような、役割語をさまざまな言語形式の要素を含む話体として、社会的なステレオタイプとしての人物像の表出ととらえ、その社会的・歴史的背景なども含め考察する立場に加え、以下に述べる定延(2006など)のような、言語形式の要素に着目し、それがどのような発話キャラクタ(人物像)を表しているかを考察する立場の二つの流れに展開していったと見ることができる⁽⁴⁾。

2.2 「発話キャラクタ」研究に見られる差別的視点

定延(2006:120)は、金水が役割語の定義の中でもちいた「人物像」を「ことばの話し手としてラベルづけされたキャラクタ」とし「発話キャラクタ」と呼んだ。「発話キャラクタ」とは「キャラクタ」の一部⁽⁵⁾であり、「キャラクタ」とは「話者の変わらない人格や身体、場面や状況によって変えることが当然とされる態度やスタイルと区別して、実際には場面や相手によって変わることがあるにもかかわらず、変わらないと見なされるような安定した話者の属性」とされる。「発話キャラクタ」は「人物像」のように「フィクションの脇役」に限定されず、「ふつう「人物」と呼びにくい動物までが、役割語の話し手になり得る」(定延2006:121)というものである。

定延(2006:124・2007a:28-32)では、金水(2003:188)が「現実世界には存在しないピジンを人工的に作り出した役割語」とした「キャラ語尾⁽⁶⁾」をインターネット上で自称高校生が用いて、たとえば「平安貴族(おじやる丸)キャラ」を繰り出す例をあげたうえで、「キャラ語尾」の一種である「キャラ助詞」を「発話キャラクタと結びつかない/それ自体がキャラクタのラベルである」役割語として論じている。つまり、役割語は必ずしもフィクションの登場人物の特定のキャラクタにのみ使われるのではなく、現実社会の話者が現実の自分とは必ずしも一致しないキャラクタを表出することも含め、話者の取捨選択により用いられる。その際に用いられる言語形式は必ずしも現実世界にモデルを持つとは限らない、すなわち母語話者の共有知識の範囲

外ということもあるというのである⁽⁷⁾。ここでは役割語の広範・普遍性、再生産性、創造性がより強く打ち出されたと言える。

定延（2007b・2011a・2011bなど）はさらに、役割語と発話キャラクターの概念を用い、さまざまな言語形式や話体の部分的な特徴、たとえば応答詞、イントネーション、つかえ方、空気すすり、あるいは言語外の手振りや姿勢などを役割語として、キャラクターによって異なるものであることを論じた。さらに文法的な要素、たとえば「発見の「た」」「動詞＋です」の使用などについても、適不適は単に文法上の問題ではなく発話キャラクターによって異なるのだとする。定延（2011a：84）によれば「（「人物像」と「キャラクター」が等しいと考えると：小林注）役割語の範囲が意外に広大であって、発見の「た」のような誰でも言いそうなことばにも実は役割語としての側面がある」という。

定延（2007b：42）は「発見の「た」」に必要なのは「探索意識⁽⁸⁾」であるとする。そのうえで、「知人と山中をハイキングしていたところ、目の前の崖の上に、思いがけずサルを発見した」という状況で、サルに気づかない友人に「ほら見て、あんなところにサルがいたよ」と「発見の「た」」を用いるのは自然ではない⁽⁹⁾が、話し手がこのハイキング行きを決めた「お節介なおばさんキャラ」なら「あ、見て見て、ほら、あんなどこにサルもいましたよ」は自然であるという。この場合、「相手と自分は共同体験をしている」という勝手な前提のもと、自身の探索意識を相手と共有のものとしてしまうことにより、発見の「た」が可能になるのだとする。さらに、このような「印象の押しつけや誘導」は日常のコミュニケーションにありふれた「荒技」にすぎず、この「荒技」と「お節介なおばさんキャラ」がどの程度思い浮かぶかによって、この発話が自然と感じられるのだとするのである。

このようにして、「発見の「た」」は発話キャラクターに結びつけられ、「役割語」とされる。「探索意識の有無」については本稿では論じないが、ここで「印象の押しつけや誘導をする」のは「お節介なおばさんキャラ」であるというステレオタイプはまさに偏見であり差別的なものである。ちなみに定延（2007b：43）は同じ「探索意識」により聞き手の専有領域に踏み込む「発見

の「た」を「無遠慮なおやじキャラ」に結びつけてもいる。

ある言語形式が自然なものとして成立する要因を細分化し、それらが、同じように細分化された話者の属性（キャラクタ）と関連を持つとする、このような見方は、常に差別と結びつく危険性を持っていると言わざるをえない。

なお、「動詞+です」を分析した川瀬（2010：132）は、この言語形式が「ある特定の社会的ステレオタイプを喚起するほどのキャラクタ性を持たない」「キャラ語尾「です」の利用のされ方としては、社会的なステレオタイプ像を決めるというよりは、性格的特徴の味付けのために用いられる」という結論を出している。つまり、「動詞+です」は、それほど役割語性を持たず、役割語として論じることあまり意味はないということだろう。

さまざまな言語形式に「役割語性」を見出し、ある特定の発話キャラクタ（社会的なステレオタイプ）と結びつけるのは一見便利な分類法かもしれないが、常に差別と結びつく危険性を持つ。役割語の範囲が拡大し、個々の言語的要素に細分化されればされるほど、この危険性は増大・蔓延する。言語形式のどの範囲にまで「役割語性」を認めるのかについては、「差別性」という視点からも問われるべきであろう。しかし、管見のかぎりでは、その後の役割語研究において、そのような点について留意したものはないようである。

3 「役割語」の再生産—翻訳と日本語教育の問題

役割語が学習されたり、また役割語を利用して何らかの表現が行われるなど、いわば再生産にかかわる問題として、以下に外国語との関連の中で行われる翻訳や、日本語教育における役割語の問題について考える。

3.1 役割語と翻訳

金水（2000：347）では、「高度な大衆メディアの存在する文化圏には多かれ少なかれ、役割語に類似した現象が見られるはずである」としてそれらの事例の収集や対照研究の必要性を説いており、実際にその後さまざまな研究が行われた。金水編（2007・2011）においても、英語との対照を行った山口（2007）・ガウバッツ（2007）、韓国語との対照を行った鄭（2007）、英語・フ

ランス語の役割語要素に基づいた対照を行った金田(2011)、ドイツコミックを社会語用論的視点から分析し、日本語の役割語要素をも取り入れたドイツ語役割語創造の可能性を論じた細川(2011)など、多様な研究が見られる。

これらの研究にほぼ共通するのは次の点である。まず、対照した各国語にも、日本語のように話者のキャラクタとの間にはっきりした関連があるわけではないが、多くの場合役割語的な現象はあるという観察、次に英語、ドイツ語などで役割語が積極的に発話の文脈に取り入れられようとしているという報告、そして、日本語の役割語はそれらの翻訳においては便利な道具となるのであり、翻訳に生かされるべきであるという姿勢である⁽¹⁰⁾。

ここには、役割語は便利なものであり、役割語を支える文化的なステレオタイプのあるようは世界共通(少なくとも互いに理解しあえる)という思い込みがあるように思われる。

鄭(2007)は役割語要素としての文末形式に着目し、話者の性別・年齢・地域などによる現れ方の違いや意識調査などから日韓の役割語対照を行った。そして、この結果に基づいて鄭(2011)では韓国大学生に対する日韓翻訳の実践授業を報告している。鄭によれば役割語は日本語では性別を強調し、韓国語では年齢を強調するという。鄭は学生に対して日本の役割語を教え、役割語意識を持たせることにより、役割語的特徴を生かした翻訳をさせる。それは「「かい、のう、ねん、ぞ」などの終助詞を(役割語として:小林注)使いこなし」「韓国語を日本語に訳す際に、韓国語原文に表れていない要素にも注目するなど、役割語的要素が豊富な日本語の特徴を強く意識する」(鄭2011:88)ような翻訳である。つまり韓国語に豊富な年齢を強調する役割語は日本語でも話者の年齢を示すような言語形式を用いて訳し、韓国語にはあまりない性別を表わす形式も日本語の役割語要素を用いて男性らしく、女性らしく訳すということになる。このように翻訳された日本語文は役割語を再生産し、増加・強調していくことになるだろう。その結果として、役割語のステレタイプとそこに潜む可能性のある偏見・差別を強化する危険性もあると言わざるを得ない。

また、日本語から韓国語への翻訳に際しても、日本語の役割語的な特徴を

生かすために、韓国語でもそれらの役割を表す話者（人物像）に相対的によく使われるような形式を使用するという⁽¹¹⁾。これは、本来それほど顕在的ではなかったはずの韓国語における役割語のステレオタイプ（と、それにともなう偏見・差別）を顕在化し助長することになるのではないだろうか。

3.2 役割語と日本語教育

日本語にさまざまなヴァリエーションがあり、それらは日本語教育の中でも認識され適宜教えられるべきものであることはすでに言われている⁽¹²⁾。役割語の中でも「お嬢様ことば」「博士語」「アルヨことば」のようなものはフィクションに用いられ、それを理解するために上級に至って必要に応じて学ばれるというのが、日本語教育の現場における現実であろう。

「女性語」「男性語」「標準語」「若者ことば」、また、初歩の日本語学習者が学ぶ丁寧体の会話文なども「話者の属性」に着目すれば役割語と見ることができる。使用の度合いはさまざまではあるが、フィクションの中だけでなく現実にも用いられる可能性のあるヴァリエーション（金水(2003)によれば「役割語度」の低いもの）を役割語として学ぶ意味はどのように捉えられているかが問題となる。実際に役割語と日本語教育について書かれたものには新井(2010)、恩塚(2011)などがあるが、いずれも役割語としての女性文末形式をテーマとし、積極的にこれを学習項目とすべきだと結論している。

恩塚(2011: 64-68)は、著者に恩塚自身も含む韓国の各種日本語教科書に女性文末形式も含むキャラ語尾などが現れる⁽¹³⁾ことから、教科書は「バーチャルリアリティ」であるとし、学習者に必要なのは「実際に使われている日本語」ではなく、「基本的で普遍的な役割語的要素」が学習者を「TP0に合わせた日本語＝真の生きた日本語」に導くとする。具体的に言えば「実際に使われている」という理由で女性学習者が男性キャラ終助詞を用いれば受け手である日本語ネイティブが拒否感を示すかもしれないというのである。

しかし、ここで問題となるのは「基本的で普遍的な」というのは誰が決めるのかということである。「日本語ネイティブの共通理解に基づき日本語教師が決める」ということであろうか。しかし、「日本語ネイティブの共通理解」

は、しばしば偏見・差別を内包するステレオタイプであり、それを克服するものとして「実際に使われている日本語」が選ばれている側面もある。

実は金水（2011:36）も、恩塚の論を受けて、この点について「現実の日本語について正しく把握している日本人はいるのだろうか」と問いかけ「実際の日本語話者の日本語知識とは、限られた経験から得られた混沌とした知識を各人において再構成した、いわばヴァーチャルな知識であり、役割語とはそのような実際の日本語話者の日本語に関する知識の一部」だと言う。「多くの日本語話者は〈男ことば〉と〈女ことば〉を正しく認識する」が、これは「絵本やテレビなどの作品の受容を通して知識を受け入れている」からだとする。だから「実際に使われている日本語」よりも「知識としてのヴァーチャルな日本語」を学ぶべきだという趣旨である。しかし、このように曖昧なものを、現にあるものだから是として教育に取り入れていくべきであるという姿勢は、たとえば、「女らしい日本語」では自分の意図を十分に表せないとして「女ことば」から離れて来ている現実の日本語使用の実態や意識とも、現実の日本語話者が是とする日本語の方向とも相容れるものではない。

金水（2011:39）はまた、日本語学習者も一つのキャラクタであり、日本語学習者が話す日本語も一つの役割語であるとする。学習者がロールプレイングしている〈日本語学習者〉というキャラクタを踏み外したり、ふれたり、途中で変わったりすると、周囲の人から不審に思われたり誤解が生ずるから、教師は学習者のキャラクタ作りを支援すべきだという。

実際の日本語教育の中で、場面や相手と自分の関係、その他の要素によって、よりふさわしい日本語の運用を学ぶという点については、「役割語」「キャラクタ」の概念があろうとなかろうと、行われることにそれほど差はないだろう。しかし、学習者を一つのキャラクタととらえ、それにふさわしいふるまい（この場合はことばづかい）をキャラクタの属性として身につけるべきだとするのはステレオタイプの押しつけであり、そのような枠にはまるか、はまらぬかが差別につながる可能性は高い。与えられる「日本語学習者」というキャラクタ以外のキャラクタを学習者自身は選択できない。また、「日本語学習者」というキャラクタが使う役割語は中間言語であるはずだから、こ

のキャラクタは、常にそこから脱却することが学習者の目指す方向であるようなキャラクタということになり、ここにも矛盾がある。

金水 (2011 : 39) は、中国人の日本語教師が自分の5歳の息子の中国語の引用として「お母さん、私は大変おなかが空いたので、もっとご飯が食べたいのです」と日本語に訳したのを、「お母さん、ぼくすごくおなかがすいちゃったから、もっと食べたい」のように言うべきだったとする。まさに5歳児ならばこうしゃべるはずだというステレオタイプが、子どものキャラクタも、話者(母親)自身の選択も、翻訳の壁をも飛び越えて、教育としてことばを支配している例だと感じられる。5歳児でもこうしゃべらない子も現にいるし、引用者として距離をおいたスタイルを取りたいという選択も、また中国語ではより感情的な言い方とそうではない言い方はあるが年齢による使い分けはあまりない、などということもあるだろう。しかしそれらをすべて無視して日本語ならば5歳児の話し方はこうと指定されるのは学習者にとっても、それを聞く一般の日本人にとっても公正な日本語のあり方とは思えない。

4. まとめ

以上から、役割語と差別に関してまとめる。

- ・人物像(キャラクタ)と結びつく話体としての役割語をカテゴリー化する研究においては、人物像のステレオタイプが差別・偏見を内包したり、また差別・偏見がことばに反映する(している)可能性が常にある。このことは金水(2003)においても認識されていた。

- ・役割語を、話体としてだけでなく、要素としての言語形式に着目し、発話キャラクタの問題として捉えることにより、役割語とキャラクタの関係はより細分化され、広範なものになった。また仮想現実であるという認識が薄れ、役割語の再生産性・創造性が強調されることにもなった。このことがキャラクタのステレオタイプが内包する差別・偏見への危険性の意識を薄め、差別・偏見を拡散したことは否めない。

- ・役割語の再生産としての翻訳、日本語教育における役割語概念の利用はステレオタイプを強化し差別・偏見につながる危険性を持つ。翻訳に利用した

り、学習者に教えるモデルとしてのヴァーチャルな「役割語」自体が差別的なステレオタイプを含んでいないか、偏見を強化しないかという検証が常に必要であろう。というより、再生産の場では、金水（2003：202）が「ヴァーチャルな日本語をうち破り、リアルな日本語をつかみ取ろう」と言ったように、むしろ「役割語」からの脱却を課題とすべきではないだろうか。

注

- (1) 金水（2003：205）の定義した「役割語」とは次のようなものである。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかに使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる時、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

- (2) 金水（2003：35）は「ステレオタイプ」を認知（知識）の問題、「偏見」を知識と結びつけた感情の問題とし、偏見と結びつけた行動を「差別」と分けて、それぞれ別のものとして整理している。言語表現としての役割語のステレオタイプは認知の問題であって、そのまま差別であるとは言えないとする立場である。この点についてイトウ（2007）は、金水が2004年コメンテータをつとめた大阪大学のワークショップ「イメージとしての〈日本〉」のセッションで、手塚治虫のマンガにおける「土人（黒人）表現」を行動（差別的な思想表明）でなく認知（ステレオタイプ）の問題とした発言を引き、間接的にはあるが「マンガを含む「表現」とは、認識と感情と行動が分かちがたい形で結びついた複雑なもの」だとして、批判している。
- (3) EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）。当講演での質問者であった遠藤織枝氏、参加者であった阿部ひで子氏からの伝聞による。「「役割語」研究の展望」と題されたこの講演の「日本語教育における役割語の貢献」という項目に関して「差別」という視点での議論がなされた。2011年当時の金水の「役割語と日本語教育」に関する考え方とこれに対する批判については本稿3. 2で述べる。また当講演の概要については以下を参照されたい。 <http://skinsui.cocolog-nifty.com/sklab/files/tallinnlecture.kinsuihandout.pdf>
- (4) 川瀬（2010：137）では役割語に対する考え方として「社会的なステレオタイプの範囲内

で考察しようという金水「様々な要素に着目し、それらがどのようなキャラクタを表しているかを考察する定延」の2つの立場をあげる。金田(2011:127)でも、金水らの「役割語の「全体的特徴」と人物像に関する研究」と定延らの「言語形式の部分的特徴(「要素」)に注目して、どのような人物像の表出に対応しているかを考察する手法」を対比している。

- (5) 定延(2006:120)は、ことばとキャラクタの関わり方について「ラベルづけされたキャラクタ(子どもっぽい言動をする人が「あの人は坊っちゃんだ」と評されるとき、「坊っちゃん」を「ラベル」として表わされるキャラクタ)、「動作キャラクタ」(「たたずむ」「ニタリと笑う」のような「キャラクタ動作の表現」によって示される「大人キャラ」「悪い人キャラ」のように動作のおこない手としてのラベルづけされたキャラクタ)、「発話キャラクタ」(ことばが、そのことばの内容とは別に、そのことばを発するキャラクタを示す「役割語」によって暗に示される老博士やお嬢様のような、ことばの発し手としてのラベルづけされたキャラクタ)をあげている。
- (6) 金水(2003:188)は、ゲームソフトに登場する妖精が「何かご用クポ?」と語尾につける「クポ」を例にあげて、特定のキャラクタに与えられ、そのキャラクタを特徴づける語尾として「キャラ語尾」と呼んだ。定延(2006:123・2007a:28)は「キャラ語尾」を「キャラコピュラ」(コピュラの変異体)と「キャラ助詞」に分けた。「キャラ助詞」は完結した文の終助詞の後にさらに加えられる独特な言語形式であるとする。これらはそのことばに話者のキャラクタが投影されているものとして役割語とされる。
- (7) 「キャラ助詞」や「ツンデレ表現」(西田(2011)など)のような、いわば新しく作られた役割語がこれにあたる。
- (8) 定延(2001:67・2007b:41)では「探索とは、未知の領域(たとえば見知らぬ街)がどんな様子なのか調べる行動を指す。探索が及ぶ領域(見知らぬ街)を探索領域と呼ぶ。探索には「探索領域はどんな様子か?」という問題意識(探索意識)が必要である」とされ、「発見の「た」」が成立するためにはこの「探索意識」が必要だとされる。なお、定延(2001)では「探索」を「命題情報のアクセスポイント」としているが定延(2007b)に至ってこれをあらたに「発話キャラクタ」と関連付けて説明したものである。
- (9) 当該例文の自然・不自然について定延(2007b:47)は大学生を対象とした調査により

判断している。「ほら、あんなところにサルがいたよ」は41人中26人が自然と判断したことにより、「抵抗を感じる話者もけっこういる」とする。ただし定延（2001：67）では同じ山中ハイキングの場面で「ほら、猪がいたよ」という例について大学生130人のうち93人が「言える」と判断したとし、山中のような、よく知らない領域では探索意識が活性化しやすいゆえに可能だとする。このあたりの判断には矛盾があるように思われる。

(10) ガウバツ（2007：155-157）は「役割語が描写する世界が日本人が創造する仮想現実であり、翻訳の際には仮想現実が非常に役立つ道具になる」としたうえで、翻訳された世界の仮想現実が「読者にステレオタイプが悪化して受け取られる可能性」もあり「読者のステレオタイプに合わず、理解が難しいが、読者の持つステレオタイプを壊す可能性」もあるとし、さらに、このような「役割語による危険性と可能性を追求した研究はまだ非常に少ない」としている。

(11) 鄭（2011）は、たとえば韓国語で絶対的性差を持つフィラーや、女性が相対的によく使うとされるフィラーを用いて日本語の女性発話を翻訳した例、韓国語において中国人を示すもっとも特徴的な役割語要素として近代小説にもその使用が認められている文末形式を利用して日本語の「アルヨことば」を韓国語訳した例などをあげている。

(12) 日本語教育学会（2007）など。

(13) 恩塚自身が、20歳の年齢差がある20代の共著者と書いた日本語教科書の中で、共著者が作った「そっか」「うん」などの中性的表現を含む女性発話者の例文を、録音担当者が「男性っぽく演じなければならない」と言った経験をあげて、文字情報だけでは女性としての印象を与えにくいと批判している。しかし、中性的表現を「男性っぽく」感じる録音担当者の感覚自体も相対的な一例にすぎないと言えよう。

なお、李（2010）は韓国の中学・高校で使われる12種の日本語教科書を調査し、女性語と男性語の区別に関する内容を含んだ教科書は1冊しかなかったと報告している。

参考・引用文献

新井潤（2010）「女性語と役割語の日本語教育」遠藤織枝・小林美恵子・桜井隆編『世界をつなぐことば—ことばとジェンダー—日本語教育 中国女文字』pp. 333-345
三元社

- 李暎洙 (2010)「韓国人からみた日本の女性語」遠藤織枝・小林美恵子・桜井隆編『世界をつなぐことば—ことばとジェンダー 日本語教育 中国女文字』pp. 347-357 三元社
- イトウユウ (2007)「差別と向き合うマンガたち」を考える」吉村和真・田中聡・表智之『差別と向き合うマンガたち』pp. 242-246 臨川書店
- 恩塚千代 (2011)「韓国の教科書における役割語の役割—「生きた日本語」を教えるパーチャルリアリティ」金水敏編『役割語研究の展開』pp. 51-70 くろしお出版
- ガウバツツ、トーマス・マーチン (2007)「小説における米語方言の日本語訳について」金水敏編『役割語研究の地平』pp. 125-158 くろしお出版
- 金田純平 (2007)「要素に注目した役割語対照研究—「キャラ語尾」は通言語的になりうるか—」金水敏編『役割語研究の展開』pp. 127-152 くろしお出版
- 川瀬卓 (2010)「キャラ語尾「です」の特徴と位置付け」『文献研究』48 pp. 125-138 九州大学文学部国語国文学研究室
- 金水敏 (2000)「役割語探求の提案」佐藤喜代治編『国語論及 8 国語史の新視点』pp. 311-351 明治書院
- 金水敏 (2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金水敏 (2007 a)「近代日本マンガの言語」金水敏編『役割語研究の地平』pp. 97-108 くろしお出版
- 金水敏 (2007 b)「役割語としてのビジン日本語の歴史素描」金水敏編『役割語研究の地平』pp. 193-210 くろしお出版
- 金水敏 (2008 a)「日本マンガにおける異人ことば」伊藤公雄編『マンガのなかの〈他者〉』pp. 14-61 臨川書店
- 金水敏 (2008 b)「役割語と日本語史」金水敏・乾善彦・渋谷勝己編『日本語のインターフェイス』pp. 205-236 岩波書店
- 金水敏 (2011)「役割語と日本語教育」『日本語教育』150 pp. 34-41 日本語教育学会
- 金水敏編 (2007)『役割語研究の地平』くろしお出版
- 金水敏編 (2011)『役割語研究の展開』くろしお出版
- 定延利之 (2001)「情報のアクセスポイント」『月刊言語』30-13 pp. 64-70 大修館書店
- 定延利之 (2006)「ことばと発話キャラクタ」『文学』7-6 pp. 117-129 岩波書店

- 定延利之 (2007a) 「キャラ助詞が現れる環境」金水敏編『役割語研究の地平』pp. 27-48 くろしお出版
- 定延利之 (2007b) 「発見の「た」と発話キャラクタ」『月刊言語』36-12 pp. 40-47 大修館書店
- 定延利之 (2011a) 『日本語社会のぞきキャラくり—顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂
- 定延利之 (2011b) 「キャラクタは文法をどこまで変えるか」金水敏編『役割語研究の展開』pp. 17-26 くろしお出版
- 鄭惠先 (2007) 「日韓対照役割語研究—その可能性を探る—」金水敏編『役割語研究の地平』pp. 71-94 くろしお出版
- 鄭惠先 (2011) 「役割語を主題とした日韓翻訳の実践—課題遂行型の翻訳活動を通しての気づきとスキル向上」金水敏編『役割語研究の展開』pp. 71-90 くろしお出版
- 西田隆政 (2011) 「役割語としてのツンデレ表現—常用性に着目して—」金水敏編『役割語研究の展開』pp. 265-278 くろしお出版
- 日本語教育学会 (2007) 「【特集】日本語のバリエーションと日本語教育」『日本語教育』134
- 細川裕史 (2011) 「コミック翻訳を通じた役割語の創造—ドイツ語史研究の視点から—」金水敏編『役割語研究の展開』pp. 153-170 くろしお出版
- 山口治彦 (2007) 「役割語の個別性と普遍性—日英の対照を通して—」金水敏編『役割語研究の地平』pp. 9-26 くろしお出版

(こばやし みえこ・早稲田大学非常勤講師)